

2025年度 第1回豊岡市地方創生戦略会議 会議録（要旨）

- 開催日時 2025年8月29日（金）午後7時00分～午後8時30分
- 開催場所 豊岡市役所本庁舎 庁議室
- 出席委員 門間座長、中嶋副座長、小田垣委員、倉田委員、倉橋委員、坂本委員、島崎委員、徳網委員、野崎委員
- 欠席委員 二方委員
- 傍聴者 5名

1 開会

2 門間座長（市長）あいさつ

座長 本日は、お仕事を終えられてのご参集、大変ありがとうございます。そして、ほとんどが新しい委員の方でありまして、委員をお引き受けいただきありがとうございます。

さて、私は市長に就任して日も浅いですが、就任する前から、地方創生は市の施策全体で取り組んでいくべきメインテーマだと考えていました。後ほど詳しく説明しますが、様々な観点から、そして短期的にも長期的にも取り組んでいかなければならない取組みであると考えています。メンバーも新たに、皆さん方にはその設計図となる戦略について、様々なご意見を頂きますようお願いしたいと思います。

これからしばらくこの地方創生戦略会議にお付き合いいただきますが、何卒よろしく願いを申し上げまして、感謝とごあいさつに代えさせていただきます。どうぞ皆さんよろしくお願いします。

3 委員委嘱

<事務局より、豊岡市地方創生戦略会議について設置要綱に基づき説明>

<座長より、委員を代表して中嶋副座長へ委嘱状を手交>

4 意見交換

(1) 第3期豊岡市地方創生総合戦略の策定方針について

座長 それでは本日の意見交換の内容であります、第3期豊岡市地方創生総合戦略の策定方針について、まずは事務局より説明をお願いします。

<事務局より、資料3に基づき説明>

座長 事務局提示の資料も踏まえ、第3期豊岡市地方創生総合戦略の策定方針について、委員の皆さんにざっくばらんにご意見やお考えを頂ければと思っていますが、まず私の思いを少し語らせていただきたいと思います。

私は「創生」という言葉を使って市長選挙を戦わせていただきました。ある意味、マニフェスト的な5つの項目ですが、それを少しひもときますと、人口減少対策が1丁目1番地だということで整理していますが、その中でも「攻め」と「守り」という言葉を使っています。人口減少の緩和策として攻めの部分、そして人が減っていったとしても市民生活の質を維持する守りの部分、大きくこの2つに区切られるのではないかというふうに整理しまして、項目とすると5つ挙げています。

まず攻めの部分として、「子育てに優しいまちへ」、「経済が活性化するまちへ」、「環境整備された『学び』のあるまちへ」、この3つの項目が、人口減少の緩和に繋がるのではないかという整理をしています。そして生活の質の維持・確保、人が減ったとしても市民生活を維持するという守りの部分として、「安心安全なまちへ」、「みんなで集えるまちへ」、こういったことも重視していきたいということで、整理をさせていただきました。

具体的な取組みとしてイメージしやすいかなということで掲げているのが、資料の左から2番目の列です。例えば、「子育てに優しいまち」ということについては、やはり子育て支援が必要だと。そしてそれは思いつきのようにそれぞれやっていくのではなくて、子育て支援のニーズをワンストップで拾って、1つのチャンネルであらゆる施策を打っていくという、ワンストップでの子育て支援という仕組みを構築できればと思っています。また、「シェアリングシティ」という考えで、人が減っているから切るということではなく、いろんな機能を、例えばコミュニティの拠点施設でも、放課後児童クラブをシェアリングする。また、多機能化・複合化という意味で、その場所にいろんな機能を追加するというので、人口が減っても逆に子育て支援が充実する、身近で子育て支援が広がる、こういった考え方が構築できないかというのがシェアリングということです。

「経済が活性化するまち」ということについては、今まで豊岡市として取り組んできた芸術文化への取組みやジェンダーギャップ解消の取組み、こういったことも経済が活性化することに繋がっていかねばならないのではないかということで、連携事業というようなことで書いています。また、コウノトリの野生復帰についてもそうですし、今すでに経済を支えていただいている地場産業、また、重要なインフラである但馬空港、こういった場所についても新たな付加価値、防災の拠点や道の駅といった切り口で施策展開ができないか。そして、先進技術の実装や特区を利用した仕組みの活用、また奨学金制度も、これはすでに本日開会の9月議会で奨学金支援制度の創設を提案しましたがけれども、経済の活性化に繋がるような人口減少対策の1つです。

今後についてですが、豊岡に住み働くそれぞれの人がキャリア形成しやすい支援というようなことも、豊岡市として何か提案できないかということも考えているところです。また学びについても、人口減少の緩和に繋がるような施策、教育環境の整備もそうですし、専門職大学があります。大学との連携による学び直し、リスキリングやリスクーリングといった学び直しについても、施策として展開し

ていけないかということも考えています。

守りの部分については安心安全、インフラ対策、災害への備え、そして医療や福祉といったマンパワーやサービス資源が低下しているところについても、それが維持できるよう意を用いていきたいと思っています。

最後です。コロナ禍を経験して、みんなが集える場所や集えるイベントというのがどんどん少なくなってきましたので、そういったことにも意を用いていきたいと思います。また、1市5町の合併後、周辺地域が置いてけぼりになっているという声も聞いていますので、振興局を中心とした現地解決型の仕組みづくりということにもチャレンジしていきたいと思っています。直接の効果としては、こういった取組みの一例が効果に繋がるのではないかとということで整理させていただいていますので、また後でご清覧ください。

この後は、長らく副座長を務めていただいております中嶋委員から、人口増減の現状について、日本全体の大きなトレンドを踏まえてレクチャーをお願いしたいと思います。また、これまでの豊岡市の地方創生の施策に対する感想や、今後のあり方についても助言などを頂ければと思っています。それでは中嶋委員、どうぞよろしくお願いします。

副座長

神戸外大の中嶋と申します。私自身も豊岡市出身ですので、毎回帰ってくるたびに懐かしいなと思いながら、そして大開通りの様子を見て寂しいなと思いながら、この会議に参加させていただいています。2015年から参加させていただいていますが、続投ということになりましたので引き続きよろしくお願ひしたいと思っています。

先ほどの座長からのご説明は、新しく市長が代わった中で地方創生に対してどのような方針と具体的な施策・事業で取り組んでいくのかという、ビジョンをお示しいただいたところかと思っています。私のほうは少し引いた形で、このまちがどのような人口動態的な特徴や課題を持っていて、その根っこはどこにあるのか、だからこういう方針でこういう事業を展開していかなければいけないんだという、根拠付けのような話になるかと思っています。この創生会議にこれまで関わってこられた方にお話ししてきたことと相当重複するんですが、改めておさらいのような形でお話をさせていただければと思います。

スライドの3枚目をお願いします。人口統計学にあまり明るくない方が多いかと思うので、なぜ人口は減るのかという、もう基礎中の基礎からです。人口が増えたり減ったりするのは、真ん中に書いてあるこの出生・死亡・転入・転出と、この4つの要因がどういうふうに動いているのかに尽きるんですね。その4つについて豊岡市の過去のトレンド、それから長期のトレンドとしてどのような動きをしているのかということを、まずご理解いただこうと思います。

やはり注目すべきところは最初の出生のところですが、これはもう皆さんよくご存じのとおり、日本全体として出生率が今は1.15まで下がってきてしまっていますので、何か今まで見たことのない水準にまで来たなと。今までは1.2とか1.3とかそれくらいの数字だったのが、とうとう1.1台になったかと、ちょっとびっく

りされている方もいらっしゃるかもしれません。それから、出生数も100万人くらいいたのが今は60万人台まで落ちてきてしまっているわけです。そして、実はもう日本だけでなく世界的なトレンドとしての出生率の低下、出生数の激減ということですが、コロナ禍で特に拍車がかかりましたが、その前から含めて10年くらいのトレンドなんです。例えば、お隣の韓国では今、0.75まで落ちてしまっていますので本当に危機的な状況ですし、それから中国でさえも1.0なんです。台湾も1.0です。それから欧米でも、かつてはフランス以北の北欧とか、あとアメリカでも1.8から2くらいあったものが、今はほとんどが1.6くらいまで落ちてきていますし、ヨーロッパの南部ですとかその他の先進国も、1.2から1.4あたりなんです。ということで、各国ともかつての出生率から大体0.2から0.4くらいの下落を見ている中、その中でも日本は1.15ということで、かなり低い部類にいるということです。

豊岡市ですが、過去10年間で出生数が半減してしまっているということで、かつて700人から800人くらい毎年生まれていたのが、直近では355人というところまでできてしまっています。この背景には3つの要素が重なっていて、そもそも女性の人口が減っている。それも出産適齢期とされる15歳から49歳、現実的には20代後半から40代前半くらいまでの人口に当たるのかなと思います。当然、お母さんたちの数が減ってしまえば赤ちゃんの数も減るというのが、まずわかりやすい1つ目の要因です。それから、生涯結婚しないという人が増えてきてしまっているという未婚化の問題。そして、結婚したとしても、これまでだったら3人くらい子どもをもうけていたのが、1人や2人、あるいは子どもがいないまま過ごしていく。この3つの要因がどれくらいの形で推移してくるのかということなんです。

特にコロナ禍に入ってからこの直近5年くらいで悪化しているのは、後者の2つの部分です。要するに、コロナ禍以降、若い人たちが結婚と産み育てるというこの2つをものすごく控えた、ということなんです。当初はコロナが終息すれば少し戻ってくるのではないかと人口学者たちは言っていたんですが、その後も経済や世界情勢はウクライナや中東のことがあって非常に落ち着きませんし、それからトランプ大統領が出てきて関税云々みたいな話もあります。そういったことが物価高騰を招いていますし日本経済も振るわないということで、若者たちが「コロナが明けたからといって、全然中長期的な見通しが良くなっていないじゃないか」と、引き続き結婚も出産も控えているというような状況です。

さらにその背景中の背景に、ちょっと社会として、結婚するとか子どもをもうけるということに対する常識というか、価値観というのが変わってきてしまっている面もあります。これは先進国全体で共通している部分なのですが、ある種、選択肢の1つということになってきていて、多様性というのは結構なんです。世代から世代を引き継いでいくということが選択肢の1つ、やってもやらなくてもいいんだということになると、こういうところで弊害が出てきちゃうと。

いずれにしても、355人という数字が豊岡市でも非常にセンセーショナルでショッキングなこととして受けとめられたかと思うんですが、特に何がそんなに

深刻なのかということ、直近5年くらいのこの未婚化と有配偶出生率の低下、とにかく結婚と子どもに係る部分をひっくるめて控えているという状態が継続していて、それが改善する見通しが立たないということです。

中長期的には、若い女性が高校卒業の段階で就職や進学で外へ出て行って、そのままほとんど帰ってこないということです。特に男性に比べて女性の流出率が大きいというところで、最初の10年間の創生戦略ではここを重点的にやってきたんですが、ここへきてこの未婚化の部分と有配偶出生率の部分も含めてケアしてあげないと、出生率はそのまま落ち続けるだろうというような形です。それから、死亡数のところは政策的にどうこうできる部分ではないんですが、団塊の世代が後期高齢者に入ってきていますので、死亡数がどんどん増えてきています。出生と死亡の差し引きを人口学では自然増減と言うんですが、とにかく死亡数のほうが出生数を常に数百人上回っている状態がずっと続いていて、その幅というのは拡大してきていますので、なおさら人口減少に拍車がかかってきているという状態です。

それから後半が転入と転出の部分のところですよ。5ページに年齢別の移動のグラフがありますが、横軸に年齢をとってしまして、青の折れ線が男性、赤は女性です。これは移動数を示しているのですが、縦軸の0から下は転出超過、まちから出ていっている人のほうが多いということを示していて、0から上は転入超過です。転出から転入を差し引きしたときに、まちへ入ってきている人が多いか少ないかというのを、年代別に示しているということです。豊岡市が非常に特徴的なのは、男女とも10代で大きな流出が見られて20代でその一部を取り戻す。私は「回復」あるいは「回復率」と言っているのですが、大体流出に対して3分の1くらい取り戻すというのが、このまちの構造としてずっと持ってきているものなんですね。ですので、3分の2くらいは流出しっ放しということで、ここでぐんと減少して人口が減ると。先ほどの出生と死亡の差し引きの自然増減でぐんと減り、それからこの若者が出たまま帰ってこないことでもぐんと減る、この2つが合わさってこのまちの人口減少が起こっているということです。ここで併せてご理解いただきたいのは、このグラフをあえて男女別で示しているというところで、女性のほうが流出が大きくて、そして回復が小さいということなんです。男性の回復率が40%台で女性の回復率が28.5%と書いてありますが、このまちが特徴的に女性のジェンダーギャップの問題として注視してきたのは、ここの部分のことです。

それから、よくメディアなどで「消滅可能都市」という用語が飛び交っていて、センセーショナルに報じられているかと思います。あの中で定義されているのは、2020年から2050年までの30年間で、20歳から39歳までの女性は何%減るのかということを基本的には指標としています。この30年間で50%以上減るとされる自治体が「消滅可能都市」として認定されて、それ以下の30%や20%というような自治体は認定されないという仕組みになっているのですが、豊岡市はこういった構造になっているので、女性が男性に比べるとかなり減りやすい構造というのをず

っと維持していることになってしまっているということです。

スライドの8ページは、日本人の男女と外国人の男女がどのように出入りしているのかということを示している図ですが、例えば一番新しい2024年の数字を見ていただくと、日本人の男性が284人の転出超過、女性が297人の転出超過です。それに対して外国人の女性は68人の転入超過、外国人の男性は60人の転入超過となっているんです。

やはり日本人の中で比べてみると、男性より女性のほうが転出超過、流出が大きいということです。これがずっと過去のトレンドとしてもそうなんだなということがご覧いただけるかと思います。

それに対して昨今のトレンドとして注目されるのが、ここ10年ぐらいですね、コロナ禍前の2016年くらいから増えているのが、技能実習生を中心とした外国人労働者の受入れです。年齢を調べてみますと18歳から25歳のあたりに集中しています。非常に若い外国人労働者が入ってきていて、その中における女性の割合というのが結構高いんですね。縫製工場などでたくさん受け入れられているからではないかと想像しています。

このまちの転入・転出のところ、社会減と言いますが、社会減のところの最近の特徴では、やはり若い人の流出が大きいんですが、そこにもう1つストーリーが出されていて、日本人の若者の流出がなかなか落ち着いてこない分を、外国人の若い人達を受け入れることによって一部相殺するという、そういった傾向・構造が定着しつつある、あるいは顕著になりつつあるということです。ですがこれは良し悪しでして、人口統計を専門にしている私などの視点からすると、統計的には良くなってきているように見えるんですね。日本人の流出分が常に百数十人分くらい相殺されてきていますので。ただ、働き手としては外国人の男女がいてくれるとありがたいことなんですが、この方たちは3年とか5年とか、長くても10年くらいですね、期間限定で豊岡市あるいは日本へ滞在して、その方たちが帰るとまた次の同じような年代の人たちが来るというような形で、働きに来るだけなんです。その若い外国人の人達が、5年後や10年後に豊岡市で家族を形成して子ども産むというところに繋がるのかというと、繋がってこないわけですね。ですので、統計で10代や20代の数が改善しているほど、将来的な30代・40代の部分あるいは出生数のところでの改善というのは見えてこないだろうということで、このあたりが悩ましいところです。

今後、外国人労働者を受け入れる制度も、基本的な方向性としては外国人がもっと長くいられるように、定着できるようにという制度に変わっていくはずなんです。そのことと、このまちがどのように取り組んでいくのかという共生の話ですね。短期的な期間限定の働き手として受け入れてそれをぐるぐる回すというだけではなくて、真にこのまちのコミュニティの一員として迎え入れて、その人たちが定着して真の意味での市民になって、家族形成して人口動態の改善にも貢献してくれるという、そういうシナリオが描けなければならないんですね。日本人の流出分を相殺してくれているからそれでいいんだと言って、ちょっとした指

標の改善に喜んでいるだけでは済まされないだろうということです。

これらを踏まえて最後のスライドをご覧くださいと思いますが、今後どうするのかというお話です。先ほど市長がおっしゃったこととほぼ重複していて、少し言葉を変えて説明しているに過ぎません。上部のところというのは、なぜ人口が減っているのかという4つの要因の中から、出生の部分と転入・転出の部分でそれぞれ対策を打つということで、これは要するに人口減少の幅を少しでも抑制していこうという抑制策、あるいは量的緩和策のことです。

一方で、これは地方創生2.0で強調して書かれていることなのですが、そうは言っても、また増えるなんてことはあり得ないんだと。今、7万人くらいいるところから、4万人になるのか3万5千人になるのか、そういう話をしているんだと。いずれにしろ今よりも半分かくらいのサイズのまちになってしまうわけで、その時のために、いかにこのまちの経済や社会、暮らしの質の部分が悪化し過ぎないようにするか。それには量的な緩和と併せて、このまちの体質改善のようなもの、質的な改善も両輪として行っていかなければならないだろうというわけですね。

ただ、これは私の今の素朴な疑問ですけれども、この豊岡市の地方創生戦略会議というのは、これまでこの上半分の部分、人口減少の抑制策・量的緩和のところを所管するとされてやってきたんですね。その考えのもとというかその目的のために戦略体系図といって、上位目的があって戦略目的があって、その下に主要手段と施策があってと、論理的に紡いで運営してきたはずなんです。それに対して、質的改善の部分というのはこの地方創生戦略会議の所管外で、ほかにいくつかの会議体が設けられていてそちらで別途やられていると。ただ、市政総合戦略みたいなどころでは一応傘としてすべてが入っているんだからと、そういうふうになってきたわけなんです。このあたりの体制の整理がどのようになっているのかということと、この会議体がどこまでの役割を果たしていくのかということとは、今後、少し整理した上で進めていかなければならないのかなと思っています。

座長 中嶋委員ありがとうございました。それでは、まず委員の皆さんに一通りお話を伺いたいと思います。

A委員 副座長の解説をお聞きして、より一層理解が深まったと感じています。

座長の「創生5」を拝読させていただいて、人口が減少していくのは仕方ないというか、受け入れざるを得ないという認識は私も持っているもので、同じところでお話ができるかなと思っていますが、人口が減っていくというこの時代の中で、住んでくださっている方を少し区分していくようなことが必要になってくるのではないかなと思っています。仕事柄、いわゆるマーケティングというところをやっていることもあって、余りに主語が大きすぎると、誰かのことを語っているようで誰のことも語っていないというようなことになってしまう気がしているので。わざわざこの豊岡を選んで住んでいる人と、選ばざるを得なくて住んでいる人というふうに、大きく分けてみてはどうかと思っています。

「子育てに優しいまちへ」というフレーズはすごく良いと思うんですが、子育て

て世代って、ある程度自分たちで選べる、どこか良いまちがあればそこに行けてしまうという要素もすごく強いんですよ。移住してきてもらおうというのが見える今のこの方針の中で、わざわざ豊岡を選んでもらおうと思ったときに、どういふうになれば選ばれるんだろうかという、そういった具体性が見えてくると、子どもを育てようと思う世代、これからまだまだ働いてくれる、所得を稼いでくれるような人たち向けのメッセージになってくると考えています。あとは選べない側の人たち、ここに住まわざるを得ない人たちに対しての何かですが、改めてDXであったり、最近だとAIの活用というようなことを提供していったりして、学び直しのプログラムのようなものを提供することによって、そういった人たちももう一度社会に出て行けるとか、働くことができるような人たちに変わってくるのかなと、そんなことをお聞きして思いました。

具体的な事例でいうと、神奈川県の鎌倉市は、教育委員会が教育長と一緒に急に変わり始めていて、各小学校単位で、どこのクラスにも属さないような学習ができますよ、ということをやっています。それが鎌倉市内の小学校全部に入っているというのが、都内の学習や教育に興味のある親にすごく刺さっていて、ものすごく転入が多いんですよ。そういった特に教育に対して熱心な人、まだまだ住んで稼いでくれる人を集めてくる具体的な施策ができないかなと。我々豊岡市だと、全国的に有名なところでは地域おこし協力隊で入ってきてくれる人が、たしか全国で2番目に多いと思うんですよ。三条市が1番だったかな、豊岡は2番とかのはずなんですけど。こういった強みをもっと表に出して行って、どういう人に選ばれているのかとか、どういう要素が選ばれているのかというところに目を向けていくと、もっと尖ったものになって行って、選ばれる可能性が高くなっていくのではないかと、そんなことを思いながらお聞きして思いました。

B委員 私は豊岡に長く住んでいますが、県立学校に勤めてきた関係で、市立の小学校や中学校というところは、保護者であった時期もありますけれども、実はあまりよくわかっていないところもあります。ですので、これからこのまちの将来を考えるとときには、市立・県立ということをお聞きせず、教育という視点で小中高、あるいは特別支援学校の縦の繋がりがもう少しできて良いのではないかと思います。

高等学校は、高校卒業後というところでいけば、実は若者を市外に出しているようなところがあるのですが、いったん市外の大学に進学しても、卒業後に一定数は帰ってきていますので、こういったところに帰ってきているのかということをお聞きを今年の春に少し見てみました。市内の県立高校で「人材養成プログラム」というのをやっている高校がありますが、それは医療系と教員系の2つに分かれているのですが、教員系はプログラムを終えた後、十数人が但馬地域で教員になるために帰ってきているということがわかりました。そう考えると、ここが果たしている役割もやはりあるんだろうということを、今年改めて思ったところです。ただ、やはり自分のところだけしか知らないというような思いもありますので、すぐに何かの結果として出るわけではありませんが、この先を考えると、先ほど申し上げたような縦の繋がりとこのところで何かできたら良いのではないかと

思っています。

また、市内の県立高校では、地域との繋がりなどを探究活動としてやっている学校がほとんどですので、そういった活動を市民の方などに見ていただけるようなことができて良いのかなと。あるいは、これはまだ私の中で考えているだけですが、高校同士の横の繋がりも今まで以上に持ちながら、何かできないかなと考えています。例えば合同での発表などを行ってそれを市の方に見ていただくとか、高校としてももう少し何かそういった地域に入れるような活動ができればなと思っています。

C委員

私の銀行のほうでも、まち・ひと・しごと創生総合戦略が出てから、地域支援を活かした事業者支援ですとか雇用の創出、移住・定住の促進といった地方創生の取組みに10年間取り組んできました。2014年にまち・ひと・しごと創生総合戦略ができたのですが、2021年の岸田内閣のときに突然、デジタル田園都市国家構想総合戦略というものに変わって、地方でもどんどんDXを推進しようというようなことになって、国の方針や枠組みの中でチャレンジして頑張ろうという市や町に交付金を出すということで、取り組んできた経緯があったかと思います。それを今回、市政経営方針と一体で策定するというのは、私は良いことだと思うので、その中に踏み込んでやっていただきたい、あまり国には左右されずにやっていただきたいなと思います。

結果としては、先ほど副座長からあったように、マクロで言うと東京一極集中がますます進んだという結果になっていると思いますが、結局、住みやすい社会を作ろうということになっています。ただ、私は全国的に見ても豊岡市は非常に特色ある取組みをされてきたのではないかと個人的には思っていて、例えばコウノトリと絡めた（環境型の）経済や農業ですとか演劇のまちづくり、あとはジェンダーギャップの取組みなどは、全国でもいろいろと取り上げられるようになってかなり特色が出ているので、あまりこれからどんどん特色を出そうとしなくても、もう十分に豊岡市はできているのではないかと、私なりの評価としてはあります。

ただ、私が少し懸念しているのが、市の部署名とか担当者の肩書きを見ると、いろいろ国がやれと言ったことをたくさんしてきて、少し増え過ぎているのではないかと考えていますので、一度その効果の検証をきっちりとしたほうが良いのではないかと考えています。市の職員のほうから「やめます」と言うのは非常に難しいことだと思いますし、市長もなかなか「やめろ」とは言いにくいと思いますので、ぜひこの会議の中で話し合いができれば良いなと思っています。

立場的に私が呼ばれたのは、多分経済の活性化というところだと思いますが、議論していきたいのが、やはり豊岡市は給与があまり上がらないということです。今、全国的にはすごく上がっているのですが、豊岡市の平均給与は兵庫県の中でもかなり下のほうにありますので、事業者の付加価値を上げること、あとは平均給与を上げることにフォーカスしてやっていけば良いのではないかという施策があります。

市の取組みとして良いなと思うものに、「豊岡市ワークイノベーション推進会議」という取組みがあります。これはもともとジェンダーギャップの解消という目的でされていたようなのですが、今はそれだけではなくて、働きやすい事業所をつくるということで、民間の方々が主体となって、市はサポートする形で働きやすい職場の枠組みを考えるというネットワーク組織になっています。市がやるのではなくて、民間の事業者が率先してネットワークを組んでやっていて、参加する事業者もかなり増えていると思うのですが、こういう会議をぜひ豊岡市に増やしていく、強化していくことが良いのではないかと考えています。

D委員

今回の豊岡市の地方創生戦略会議においては、「創生5」の実現に向けた方向性というのが伺えましたし、豊岡市独自の攻めと守りの戦略として非常に具体化していくことがよくわかりました。豊岡市のこの戦略と国の地方創生2.0は、非常に高い整合性を持っていると思いましたので、この部分では国との連携が円滑に進むのではないかと考えて聞かせていただきました。実際にこの人口減少が不可避という前提でこれも作られていて、豊岡市が攻めの部分で子育てに優しいまちとか経済が活性化するまちなどというように、はっきりと戦略を出されていたので、そういうところは素晴らしいなと思いました。ただ、人口が減少する中でも、市民一人ひとりの生活の質とか幸福度ですね、それが向上しているかどうかという視点がもう少し見える化できないかなと思っていて、豊岡市独自のそういう指標を持つことも良いのではないかと考えました。

戦略を策定するにあたっては、できる限り具体的な事業を落とし込んでいくようなところも見えていて、タウンミーティングであったり出張市長室であったりといった取組みも非常に有効なのではないかと考えました。地域の市民が思いを届ける機会が提供できているなと思うとともに、さらにその思いを届けるだけではなくて、市民が主体的に課題解決に参加できるような仕組みが具体的にあれば良いのではないかと考えました。人口減少下でも活気のある社会ということを考えると、やはり高齢者とかあるいは全世代に向けての生涯学習とか学び直しの機会が提供できたりとか、また地域コミュニティを維持・強化したりすることも必要ではないかと思います。全体的なことを申し上げますと、今まで申し上げたこととともに、海外インバウンドの観光需要も増えてきて海外の観光客の方もいらっしゃるということから、インバウンド観光においても充実した多言語の対応などが重要なのではないかと考えます。

実際にこれらのざっくりした全体を通した中での政策の実効性を向上させるためには、まずやはり実行するためのワーキンググループや実行委員会のようなものの設置があれば、もっと具体的に進むのではないかと考えました。そして、豊岡市には豊岡高校や兵庫県立大の大学院、そして本学のような大学もありますので、さらに連携を強めて地域資源を活用したさらなるプログラムなどを地域に提供するような方向で、将来の地域を担う人材の育成に貢献できれば良いのではないかと考えました。やはりせっかく資源もたくさんあるところですので、日本全国のモデルとなるような地方創生を実現できるだけの可能性は大いに秘めています。

すので、具体的な実行力を持ってこれらを進めていただければと思っています。

ちょっと高知県の事例で恐縮なのですが、高知県は生活サービスの課題ということに対しては、例えば遠隔医療という方法で解決したりとか、馬路村なんかはもう堂々たる田舎であり続けるというような哲学のもとやっていたりとか、人材育成の分野ではA I 塾のような構想があったりとかですね、人口減少に大きな課題がある市町村ではいろいろな取り組みを行っています。

最後に、昨年度本学を卒業した1期生についてですが、約20名が豊岡市内に残っていて、そのうちの8割が女性です。ですので、これがずっと続いていけば、5年で100名ということにはなるのではないかと思います。22歳や23歳の若者たちがこのように定着して増えていく、あるいは定着して暮らしやすい仕組みというのも大事ではないかなと最後に申し上げます。

E 委員

私は教育委員会の委員として来ているということもあるのですが、一般社団法人「ちいきのて」という、地域コミュニティと行政の中間支援をしている組織にも所属しています。地方創生に繋がるのかということではないんですが、各地域の方々もやはり少子高齢化を課題としてしまうと、もうその課題に対して解決していけないというような考えを持っていらっしゃるって、地域づくり計画という、自分たちの地域をどう考えていくかという10年間の計画をそれぞれ策定されている中で、地域をどのようにして運営していかなければならないのかというのを、結構しっかり考えていらっしゃいます。確かにいろいろな構想がある中なのですが、こういった地域の方々とも連携しながら、市としてどうすればその計画が実現していけるのかという支援を行っていくことも1つだと思います。地域づくり計画の中には、例えば福祉や防災ということもしっかり考えて検討されている内容もありますし、ただ単に地域行事を楽しくみんなでやろうよという話だけに終始しないものになっていますので、そういったものも活用しながら地域とともにやっていくというのも1つの方法ではないかと思ったところです。

私も高校を卒業して大学で出ていった身です。戻ってきてはいるんですけども、具体的に帰りたいと思って帰ってきたわけではない部分もありますので、高校生などに向けてどういった仕事があるのかというのをもう少し知ってもらう機会というのを、求職のセミナーのようなものもしていますが、そうではない形で展開できないのかなと思います。

「ちいきのて」は地域おこし協力隊の支援もしているのですが、「なんで豊岡がいいの」と聞くと皆さん結構しっかり意見を持っていて、豊岡市のホームページを見て非常に感銘を受けたと言っている方も多くて、そういった方々の声を拾うなどして結構定住率も高いんですね。なので、非常に小さいパイではあるんですが、そういった住み続けようと思っている人もいるんだというのを、よそ者という視点から見ていくのも面白いのではないかと思います。定住というだけではなくて、豊岡市で創業したいんだという意欲を持った若者や地域おこし協力隊もいますので、そういうところも何か糸口になるところではないのかなと思っています。

F 委員 出石の観光協会の立場と建設業という立場で、少しご意見させていただきたい
と思います。

冒頭に座長から人口減少対策が1丁目1番地だという話がありましたし、やはり高校を卒業して大学進学で出ていったらもう帰ってこないという話もありました。私は商工会の関係で地元の出石高校で模擬面接をやらせていただくことがあるのですが、その中には地元の企業に就職する子もいますし、遠方のところに就職する子もいます。その場で、その遠方に行くという子には必ず「地元にもこういう似たような仕事はあるで」という話をするのですが、ちょっと何かが違うのかその会社の中身がわかってないのか、そこは少しわからないんですが、やはり一度は外に出たいという気持ちを持っています。出るのは全然いいんですが、こっちに残っても同じような職種はたくさんあるという話はさせていただいたことがあります。それから、親御さんと話をすることもあるんですが、その親御さんも「こっちには仕事がないから出ていきなさい」という、親御さん自身がそういう教えをされているところもあるんです。ただ、今はITの部分でいろいろなことが進んでいるので、別にわざわざ都会に行って仕事をしなければならないわけでもないし、地元に残ってもできる仕事はあります。多分、その人口が外向きに出ていってしまっているというのを知らないというところが、一番大きいんだと思うんです。

出石高校では、いろいろなことでまちの取組みに対して一緒にやりましょうということで、先ほどB委員がおっしゃったようなことですが、授業の一環として地域と一緒にいろいろなものを作り上げたり、企業の人間が講師に行ったりというカリキュラムが、年間通して何時間か組まれていますので、そういう体験をした子たちが出石で就職するという例も、何名かあるのはあるんです。豊岡がいいというような話もありましたが、豊岡の医療とかそういうのが高いから流出した子もいて、隣の養父市に移住して、仕事自体はまだ豊岡でしているというような子たちもいるので、やはり届かない面もたくさんあるのかなというふうに思っています。

市長が一度、少年野球のときにお母さん方と少し意見交換していただいたことがあったんですが、やはりそういう細かいことを拾っていただくというのがすごく大事なことになるのかなと。全部は無理でも1個ずつ拾っていただくような機会をもっと設けてあげると、いろいろな施策に何か繋がっていくのではないかと思います。

G 委員 過去の施策を見せていただいて、演劇を授業に取り入れたりふるさと教育をしていらっしやったりするのが、地方創生の施策の中でされていたことだったんだなというのを、今回知ることができました。今、私の子どもは学生なんですが、小学生の子どもは割とその影響を受けていて、豊岡が好きだ、将来帰ってきたいというようなことを言っています。今そういう教育を受けている子どもたちが、これから大学に出て帰ってくるというのはまだ先の話だと思いますが、ある程度そういう効果が出ているのではないかというのは体感しました。

あと、地域おこし協力隊のことですとか、外部から人を入れていくということも大事なんですけど、A委員がおっしゃっていたように、ここを選ばざるを得ない人たち、今住んでいる人たちの声をもう少し聞いていくということも大事なかなと思っています。例えば、今、地元で活躍されている企業の方ですとか働いていらっしゃる方の意見も聞いていかないと、やはり地元の企業と地場産業を盛り上げていかないと雇用の創出もできないですし、賃金アップとか職場環境といったところにも繋がらないと思いますので。地元の企業の声を聞く機会もやはり増やしていかないと、結局人口の回復には繋がらないのかなと思います。

私も豊岡市出身で、大学で外に出ました。今は帰ってきているのですが、私の友人とか周りの女性たちを見てみると、やはり豊岡では出会いがないといって、進学を機に外で出会った人とそのまま外で結婚してしまうというケースが多いです。いったん外に出てしまうのはやむを得ないし、外で結婚することもやむを得ないとは思いますが、では何で帰ってこないのかというあたりを少し考えてみると、やはり結婚して自分が子育てをするとすると、配偶者のほうの仕事が重要になってきます。そこで、なかなかやはり仕事がないということ言う人が多いので、豊岡にはこんなにたくさんの職種と働く場所があるということを広める方法というのが、もう少しがあれば良いのかなと思いますので、また会議の中で皆さんと一緒に良い案が出せたらなと思います。

座長 ありがとうございます。それでは、一通り発言いただきましたが、本日欠席の二方委員からは、書面で意見を頂いていますので、事務局で代読させていただきます。

＜事務局より、資料5に基づき二方委員提出意見を説明＞

座長 委員それぞれの今のお立場、そしてこれまでのご経験も踏まえて発言いただき、大変示唆に富む内容であったと思います。そこをどう消化していくかということをお願いしながら聞かせていただきました。

最初のA委員からあったマーケティングやターゲティングというところについては、また皆さんのご意見や副座長の知見も頂きながら、誰をターゲットにするのかというターゲットを絞った施策、またターゲットを絞った課題の改善というところで戦略を取りまとめていくと、より成果に繋がっていくのではないかと感じながらお話を聞かせていただきました。移住であれば若年世代とするのか、またその中でも男性なのか女性なのか。あるいは子育て世代の中でも働く方に向けた話なのかその子ども向けの話なのか。そして高齢者の中でも、今いる高齢者をターゲットにする施策なのか、それとも2拠点居住みたいなことを目指す方をターゲットにする施策なのか。また、よそ者の方でも地域おこし協力隊の方たちなのか、もしくはいったん外に出た地縁のある方をターゲットにするのかなど、ターゲットを誰に絞るかによっても様々な施策の想像が膨らむなということを感じたところです。

この後は、委員の皆さんからも、ほかの委員の方の発言を受けての感想やご意

見、ご質問などを頂ければと思います。

G委員 今、座長がおっしゃったように、確かにターゲットを誰にするかで施策は全然変わってくるので、主要な施策をいくつか出すのかによって、ターゲットも必然的に絞っていくことになると思います。ただ、どちらを先に決めるべきなのかというのは、皆さんそれぞれの立場でいろいろなターゲットがいますので、何だか難しいなというのが感想なんです。

それから、国の方針も、人口を増やすとか戻していくということよりも、今ある地域をもっと活性化しようというようなところが変わってきたのかなと思いましたので、過去にやってきたことの復習ではないですが、それが今の地域の方々にどのような影響があったのか、もしくはあまり影響はなかったというところなのか、そのあたりの意見を聞いていくということをしてみたらどうかなと思いました。

座長 過去の施策の成果のようなことを聞いてみるのも良いのではないかというお話でしたが、そのあたりは長年関わっていただいております副座長、何かお話しただけのことがありますでしょうか。

副座長 過去からやってきたことで成果が出ていることですか。やはり、一番代表的なところは社会減対策のところでやってきた、演劇のまちにするという取組みでしょうね。平田オリザさんと当時の中貝市長とが出会われたことでケミストリーが生まれて、専門職大学の設立にも繋がりましたし劇団青年団も移住してきました。専門職大学の学生が大体330人くらい、職員が40人くらいいますので、それだけでも400人くらいは集めているわけです。それから地域おこし協力隊ですが、どういう人たちが評価して全国でも2番目の隊員数が集まっているかという、ほとんどは演劇関係なわけですね。ですので、そういうところも含めると、少なく見積もっても500人くらいのインパクトが出ている話なわけです。先ほどどれくらいの規模感の流出なのかというのを見ていただきましたが、400人とか500人くらい日本人の若者が流出しているのを100人くらいの外国人の転入で相殺しているというところに、この数百人規模の新しい若者の流れを新たに作り出せているというのは、大きな成果の1つかなと思います。

ただ、人口の話は長期的なものなので、ワンタイムで数百人増えたとか減ったといって一喜一憂してはダメなわけで、こういう流れが定着して、長期的にこのまちの人口の規模や構造にインパクトを伴うところまで脈々と続けていくということが重要なんです。これはもう最低でも20年や30年くらいは継続していかないと、このことをやっていてよかったなという振り返りはできないわけです。ですので、今後いかに持続的にやっていけるのかということと、2040年や2050年になって振り返ったときに、これをやったことで3万人のまちではなくて3万5000人のまちになれたとか、少しは賑わいが保てたとか、小さいまちなりの新しいあり方というのがこの期間にでき上がってきたなということができていれば、なお良いのかなと思います。

座長 人口の流れの定着というようなキーワードに新たに触れていただきました。F

委員に伺いますが、そういった流れの定着というところで何か感じていることや、こういったことが定着に繋がれば良いなということがもしありましたら、ご意見を頂きたいと思います。悪い流れを断ち切るということでも結構ですし、ご自身の経験や観光協会、建設業の協会といった中で、頭の中で思い当たることがあれば話を広げてもらえればと思うんですが、いかがでしょうか。

F 委員 流れというのは難しいですが、会社のほうで言うと、ほかの業者さんと比べるとありがたい話なんですけど、今、毎年何名ずつかは採用ができていますが、やはり先輩後輩みたいな繋がりで人が入ってくるということがあります。外に出ていたけど家の事情で帰ってこないといけない子がいたんですが、その子も同級生がいるからといって会社に入ってきてくれたということもありました。ただ、一時少し空白ができたことがあったのですが、やはりそういった先輩後輩とか横の繋がりがなくなかなか人が帰ってこなかったのも、会社としてはそういう感じになるのかなと思います。

観光では、どこの観光地もそうなんですけど、コロナ禍前と比べると8割くらいは復活していて、2割くらいがなかなか戻らないというところで、出石地域もそうですし、城崎温泉や湯村などでも同じような話をされています。(旅行の形態が)団体から個に変わってきて、行くところも多様化してきていろいろなところに行かれる中で、この地域を選んでもらうためにどうするのかというところもあります。チーム豊岡、チーム但馬で、やはり地域全体で人を引っ張ってこなければならぬ中で、城崎には外国のインバウンドの方が来ています。かといって、それが出石や日高にきているのか、竹野に向かっているのかというと、ほぼ皆無に近い状況です。それらの人を動かそうと思うと、二次交通とかいろいろな社会インフラの話も出てくるので、このあたりの整備も必要だと思います。ちょっと回答にはなっていないかもしれませんが、そういう感じです。

座長 ありがとうございます。先輩後輩の繋がりという関係があって人が雇えているというのは、少し定性的ではありますがそこが社会減の抑制には導かれることがあるのかなと思いながら、お話を聞かせていただきました。

それから観光の話ですが、当然これまでもやってきましたし、これから大変重要なことだと、市長としても思っています。そこを人口減少対策や仕事をつくるといったことも含めて、もう少し地方創生に繋がるようなものと何かマッチングできればと思いますので、ぜひ現場の声もお聞かせいただければと思っています。

次にE委員いかがでしょうか。良い流れを感じることもあれば、そういったキーワードも使いながらお話を頂ければと思いますが。良い流れというところでいきますと、何かすごく抽象的な話で申し訳ないですが、私はちょっと楽しいまちになってきたのではないかと感じているのですが。

E 委員 私も何かちょっと若者が元気なまちになってきたのではないかなというのは感じるところです。専門職大学の方も増えてきて、若い方を見かけることが多くなったというのは、うれしいなと思っています。

ターゲットの話がありましたが、それもあるにしても、今後、何を重点施策としていくのかということよりも、本当に実現可能なものとするための細かいアクションプランのようなものを立てていけるのかというのが、難しいんですがすごく大事なだろうなというのを、皆さんのお話を聞いて思いました。

座長 ありがとうございます。それでは次にD委員にお聞きしたいのですが、私は個人的に、今の若者の仕事に対する取組みはキャリアアップや自己実現といった、報酬とはまた別の価値観で重要視しているという感覚があるんですが、もし施策として学び直しというものを広げていく場合に、どんなことが考えられるのかということについてご意見を頂ければと思いますが、いかがでしょうか。

D委員 学び直しというところで若者に特化したことと言えば、やりがいのプログラム、志みたいなどころですよね。自分の信念とか志といった精神的な部分に働きかけるような、そういう振り返りのプログラムを考えたり提供したりというのは、当然、本学としてできるのではないかと思います。

あと、全世代に対して特に私が感じているのは、今、竹野に入らせてもらっていますが、観光資源の多さもあるのですが、やはり竹野地域の方は非常に積極的で、地域の人材のポテンシャルはすごく高いと思うので、そこに関わっていった地域の人が元気になるというのはすごく大事なことはないかと思いますし、そういうところへのプログラムの提供というのも考えていかなければならないのではないかと思います。やはり本学の学長自身が、演劇も含めてですが、豊岡を日本の人材育成の拠点、あるいは世界の人材育成の拠点にしていくくらいの勢いを持っている方ですので、そういうことも含めて人材の育成というところでのプログラムの提供はできるのではないかと思います。

座長 ありがとうございます。もう1点、生活の質の指標というお話も頂きました。いろいろな考えがあると思いますが、その生活の質の指標というのがどういことなのか、この会議の中で少し共有できるようなことを伺えればありがたいのですが。

D委員 具体的な項目というのはそんなに思いつかないんですが、やはり私もこちらに来て1年ちょっと経ちましたけれども、本当に感じたのは、やはり竹野地区の皆さんの日を追うごとにキラキラしていく姿とか、そういうのをずっと見てきたんですね。皆さんどんどん積極的に参加もしてくださって、自分の地域をどんどんアピールしてくださる様子を見ると、それって関わり方ひとつで地域の皆さんのやりがいにも繋がるのではないかと。地域の皆さんが課題を解決しながら、今、実際に政策のような感じで作り込んでくださっているわけですね。このやり方というのはなかなかビジネスモデルとしてはそんなに多くないので、まさに豊岡発の素晴らしいモデルになるのではないかと思います。皆さんが感じるやりがいとか、地域の人と関わりながら元気になっていくというのは、豊岡独自の指標にできるのではないかと思います。

座長 ありがとうございます。またぜひこの会議を通じて、そういったことも具体的に浮かび上がるようなことになればと思います。

それではC委員にも少しご意見を頂きたいと思いますが、特に経済の観点です。ターゲットを絞るというのは人というターゲットなのか、あるいは企業というターゲットなのか。また、企業の中でも分野というターゲットなのか。経済1つとっても切り口がいろいろあると思いますが、ご自身の今のキャリアや経験の中で、地方創生や人口減少対策に資するようなターゲットの決め方というところで何かご意見があれば頂きたいと思います。

C委員 国がよくスタートアップスタートアップといって支援してきていて、今、神戸市でもスタートアップにすごくお金と人をかけてやっていますが、実はその神戸市でさえスタートアップはそんなにないですね。豊岡でもITの事業拠点ができたりはしていますが、やはりこういった地方でスタートアップできるのかというと、なかなか難しいのかなと思っています。

どこに注力するのが良いのかというターゲットですが、基本的にはやはり地元企業がありますので、その後継者ですとか若手のリーダーの方たちが、新しい事業や海外の新しい販路の開拓に取り組むことによって、事業所の付加価値を高める施策をしていくのが良いのかなと思います。事業承継にも繋がりますし企業の永続性も高められるということで、私はやはりここに一番集中するのが良いのかなと思います。

今、豊岡市はステップアップ補助金というのがありますが、お金だけではなく、やはりネットワークの部分ですね。今までは会社の社長しか出てこなかったような場に、部長や課長といった管理職として女性の方もたくさん出てくるようになったんですが、先ほどのワークイノベーション推進会議のような場ですとか、いろいろ新しいことにチャレンジする場というのを、民間事業者中心で立ち上げていけると良いのではないかなと思っています。経済面で言うと、国や市からお金をどんどん引っ張ってくるというよりは、みんなで新しい事業をしようということに取り組んでいくのが、地方創生としては良いのではないかと個人的にはと思っています。

座長 ありがとうございます。1つ質問ですが、例えば今の段階で、女性に選ばれる事業所は少しずつでも増えているという感覚なのか、もしくはそのあたりの施策についてはまだまだ検討の余地があるのか、そのあたりについて伺いたいのですが、いかがでしょうか。

C委員 女性に選ばれるというのはなかなか、やはり女性の目は厳しいので、良い会社に女性は行きたがるということはあると思います。当行でも採用面ではインスタを使ったりとか、もちろん給料を高くしたりもしていますが、本当にこれで解決するというのはまずなくてですね、いろいろな手を打って、試行錯誤してやっていくのが良いのかなと思っていますので、そういったことをほかの事業者さんとも共有できる場があれば良いかなと思います。

座長 ありがとうございます。少し無茶振りでしたが、そういったことについて少し皆様のご意見を伺いながら、より現実的な施策に繋げていければと思って話を振らせていただきました。

それではA委員、これまでのお話を聞いていかがでしょうか。委員のターゲットを絞ってはどうかということを切り口に広げさせていただきましたが、また、新たにこういうことが必要ではないかということもしありましたら、お話しただければと思います。

A委員 皆さんのお話はよく聞かせていただきました。E委員やD委員がおっしゃっていた、若者が元気になってきている実感があるとか、竹野の人たちが日を追うごとに活動的になっていったというようなことを、いかに市民の人が感じて、それを外に発信してくれるかというところが、すごく重要になってくるのではないかと考えています。副座長がまとめてくださっているものも、やはり数字で語るからこそわかりやすくなっている部分もすごくあると思うんですね。女性の回復率ということで、率にしてみるとほとんど帰ってこないんだということが見えてくるわけですね。ただ、そのE委員やD委員が実感していらっしゃるものって、例えばGDPのような数字で表そうと思っても不可能に近いと思うんですね。そういったものをどうにかして指標化してわかりやすくしていこうという取組みも含めて大学で研究するなどして、豊岡市はまさにそういった先進的な取組みをやっているところなんだということを、もう少し学術的にも発信していくべきではないかと思っています。行政としてそういったことをアピールしていけると、これからどんどん人口減少が進んでいく中であって、先端的なことをやっているまちというような言い方も、もうでき始めるのではないかと考えています。そういうことを言うことができるようになってくると、それがだんだんと市民に浸透していったら、最終的には市民が豊岡に誇りを持つということができ上がってくる。こういったところを、それこそ市長のコミュニケーション力を使って市民に訴えかけていってもらえるとより良くなっていくと思いますし、ブランディングみたいな発想も必要になってくるかなと思って聞いていました。

座長 ぜひコミュニケーション力を発揮できる素材を、この戦略会議の中で浮かび上がらせていただければありがたいと思います。

やはり高校卒業のタイミングで豊岡を離れるというのはもう数字でも如実に出ていますので、どういうことをすれば留まってもらえるのか、あるいは一度外に出たとしても豊岡に帰ってきてもらえる確率が高まるのかというところは、本当に成果を上げたいなと思うところです。先ほどB委員からは小中高の縦の繋がりとあるとか、また高校同士の横の繋がりとあるということを少しご提案いただきました。これまでのお話をお聞きになって、この豊岡市の地方創生戦略の中で、高校の校長先生の立場としてどのように行政が関わっていくとそういったことに繋がるかということについて、おぼろげながらもお話しただけることがあればお聞きしたいと思いますが、いかがでしょうか。

B委員 先ほど縦の繋がりと横の繋がりと申し上げましたが、やはり教育というのはこれからの将来への投資ということだと思いますので、豊岡ではこんなことをやっているんだということが伝わるようなことを、小学校や中学校、高校だけというよりは、全体で何か発信できたら良いのかなというのは思っています。

「良い流れ」という言葉が何度か出てきましたけれども、専門職大学さんが中心になってやってくださっているコミュニケーションワークショップも、何年か続いてすごく定着してきたと思っています。そういったことがもう少し何か別の形で、縦や横でできないかなというのは、本当におぼろげながらですが考えていますし、それを豊岡の特色として外に出せると子育てされる方に発信できるかなと思ったりもしています。

それから、高校を卒業して外に出た人たちにできるだけ帰ってきてほしいというのはすごく思いますし、もうずっと長い間の課題だと思うんですが、やはり今思うと、大学に行くとか就職するということだけが何かこの先の目標であるかのような進路指導ではなく、例えばその先のキャリアであったりこんな仕事があるよということであったり、そういったところまで進路指導の考え方を変えていくことができればというのは、最近思っていることです。大学進学だけがゴールにならないように、いろいろな選択肢を提示しながら自分の生き方を考えさせるような指導までいけたらなと。それにはやはりこの会議の場だけでなく、地域の方のご支援も頂くことができればというふうに、ここのところは本当に個人的な意見になりますが、今思っているところです。

座長

ありがとうございました。進学だけがゴールにならないようにということをいかに豊岡で学び育った子どもたちに思ってもらえるかということも、この創生戦略の中のテーマとしてぜひ取り組んでみたいと思いました。

これまでの皆さんのお話から、やはりターゲットを絞るということが1つと、それから指標やKPIのようなものは何が立てられるか、それを追いかけていければと思います。今後とも皆さんの様々な視点を頂きながら、また、KPIにするために、今どういう状況にあるのかというところについても皆さんのご意見を頂きながら分析できればと思っていますところです。

時間ももう過ぎていきますので、意見交換はこのあたりにしたいと思います。今後も会議はありますので、またその際にご意見やお話をお伺いできればと思います。

5 その他

<事務局より、今後の具体的な策定作業の説明及び第2回会議に向けた事務連絡>

6 閉会